第 27 回発行

ぶらんこ

令和２年 12 月 16 日(水)
おおむたこども園
金丸恵美子

あそびと学び発表会に寄せて…

先日は、「あそびと学びの発表会」のご観覧ありがとうございました。コロナ禍の中、クラスごとの少人数で進行しました。数年は、このような人数の制限が必要な行事が予想されるところです。
今年も、子ども達の日常を邪魔しない行事の在り方を意識し、子ども主体に出し物を選びました。見せたかったものは、まだまだたくさんあったようですが、担任は、持ち時間に苦労したところです。

当園の発表会は、５歳児(ばなな組)が、１クラス５～6 人で演じる劇をすることになっています。昨年の年長組の劇をよく覚えていて「今度は、自分たちだ！」と意識も高かったようです。なぜ劇なのか？それは、子どもの遊びが「役になって演じる」そのものだからです。ままごとは、家庭の模倣。お店ごっこは社会の模倣。鬼ごっこやわらべ歌遊びにも「役」があります。子ども達は、自分や友達を何かに見立てて、演じて遊ぶ天才です。発表会で、遊戯などの演目は無くなりましたが、この見立てて演じる劇だけは残り続けると思います。(劇だけを発表する園は結構あります。理由は、前書の通り演じることは、子どもの遊びだからです)

各クラス、何の劇をするのか、配役や小道具などの必要な物を話し合ったそうです。配役については、「鬼」や「意地悪なおじいさん」などは、子どもの立場でも「悪役」、したくない役のイメージがあります。一斉保育の頃に、「なぜうちの子が…」と保護者から苦情を受けたこともありました。だから保育士が悪役をしたり、物語をハッピーエンドにしたりする傾向が、保育界の中にあったと思います(今でもあるのでしょう…)

しかし、少人数だと誰かがやらないといけないという意識が、子ども達の中に高いように感じます。みんながリーダー。そして子どもなりの責任感を持って取り組んだ劇だったと思います。大人数の中では消極的な子どもは友達の陰に隠れがち…。台詞も他の子どもと一緒に…。何となく辻褄を合わせ参加させていた自分の保育を思い出します。

例え小さな声でも台詞を独りで言うことは、かなりの勇気が必要です。５～6 人で演じる小さな劇が、ひとりひとりにスポットライトを当て、更なる子ども達の自信につながったと自負しながら目頭が熱くなる、あそびと学びの発表会でした。

子ども達の近くに火を…

念願の釜戸が出来上がりました。焚口が２つにあり、これまでの簡易式よりも燃焼などの効率が断然良くなります。何よりも昭和の素朴な暮らしを子ども達に経験させたかったのが、釜戸を造った最大の理由です。これは、80 歳半ばの左官さんの作です。熟練の腕と経験で…。もちろん設計図などありません。子ども達は、おじちゃんが、モルタルを鏝(コテ)で塗る作業をフェンスにへばり付いて見ていました。だから、同じようにおもちゃのコテを使って泥を塗り固める遊びをしています。大人がお手本、モデルだとあらためてレジェンド左官さんから教えてもらいました。

寒さが増すに伴い、焚火の周りで過ごす子どもが多くなりました。出勤するとすぐ火を起すことが私の日課です。はじめに、方言で点(て)っけと言われる杉の葉や新聞、段ボール紙などにマッチで火を点けます。次に小枝をうず高く盛ります。炎は小さく、今にも消えそうになります。でもうちわで扇げば、また炎に勢いが増していきます。毎日園庭の囲炉裏で焚火をしていますと、焚火は人の一生に似ているなと思います。始めの点っけのところは、誕生そのもの。油断をすると小さな炎が消えそうになります。目を離さず小枝(方言ではベラといいます)を投入するなど手をかけないといけません。子どもを育てるのに似ていると思うのは私だけでしょうか？

次に中位の枝を燃やします。急激に炎が大きくなったり、小さくなったり狂ったように燃え出すこともあり、炎は安定しません。思春期の子どもの心情や身体の成長を思い起こさせます。そして、大きな薪に火が付くと炎は、勢いを増し次々に燃焼の範囲を広げます。この様は成人になり精力的に働く大人のようです。しばらくすると炎はかなり安定し、30 ㎝くらいのパチパチした炎に変わります。この炎の状態の時、子ども達は、「ぼー」と一点を見つめています。火からの癒しを感じる時です。ここは、人生の安定期の壮年期でしょうか。薪が炎を出さず赤く炭状に燃える、これがいわゆる熾火(おきび)の状態…。この火で「スルメ」や「がらんつ」を焼き、さつま芋を放り込みます。この熾火の状態が、釜戸を造ってくださったレジェンド左官さんと重なります。熟練の技を思い起こさせます。熾火は本当に良い仕事をしますから…。焼き芋ができるころ熾火は灰になっています。甘くておいしい焼き芋が、子ども達のおなかや心を満たしてくれます。私も熾火のようになれるのか？燃え尽きた後に何が残せるのか？そんなことを考えながら毎日子ども達と焚火を囲んでいます。